

ジュリヤン・グリーンと〈他者〉の問題
— *L'Autre* 読解のころみ —

井上三朗

—私の人生を救うもの、私の人生を弁明するもの、それは私が誰かを愛したということであり、今も誰かを愛しているということであり、そしてこれからも地上で愛することができるかぎり、いつまでも誰かを愛するだろうということなのである。[強調グリーン]
(*Les Années faciles, Journal I*, 10 fév. 1933, IV, p. 224)

I

Julien Green (1900年生れ)の*L'Autre*は1968年2月から70年5月までの時期に作成され、翌71年に発表された十三番目の長篇小説である。この小説は自伝的と形容しうるグリーンの世界群のなかでも、とりわけ鮮明に彼の内心のドラマを表出するとともに、彼の終生の苦悩のみなもとであった他者=愛の問題をとくに深く掘り下げてあつかっているという点で無視できないように思われる。

*L'Autre*の主題は〈他者〉との出会いという点に限定される。そして短篇*Christine* (1923年作成)から*Moira* (1950)を経て前作*Chaque homme dans sa nuit* (1960)までのグリーンの世界の主題もまたこの一点に収斂されることを考えあわせるならば、*L'Autre*は彼の文学の成熟ないしは完成したかたちとして、彼の世界の全体像への接近を容易にするだけでなく、固有の主題の追求・深化をとおして彼が目指し、そして到達した地点の理解を可能にするという意味で、充分検討に値いするように思われるのである。

日記（現在まで十冊を公表。最近刊は *La Bouteille à la mer*, 1976）および四巻の自伝、ことに *L'Autre* と前後して公けにされた *Terre lointaine*（1966）と *Jeunesse*（1974）を通じて、私たちは今日、なにゆえにグリーンが〈他者〉との出会いを恒常的テーマとし、このテーマを自らの作家的拠点とするにいたったのかを、はっきりとたしかめることができる。その理由は、伝記的事実に即するならば、人生の門出というべき青春時代に、彼が強烈な、しかも償いようのない出会い（愛）の体験を実際にしたのだということである。しかしこの過去の事実は一切を還元してはならない。ことがらはむしろグリーンの内面の真実にそくして考察されるべきである。すなわち、彼が〈他者〉との出会いを自らの文学主題とする動機は何よりもまず、修道士としたかもしれないような熱烈な信仰をもちながら、¹⁾ 彼がこの世の魅惑にたえず内心をひき裂かれたこと、具体的にいえば、ピュリタニズム的態度を有し、さらには同性愛の傾向をうちに秘めることで、終生彼が孤独と肉体の苦悩のなかで生きることを余儀なくされたという点に存するのである。そしてこの苦悩こそ、過去の体験に源を発する主題を彼に選ばせているということではないのだろうか。

L'Autre は Roger と Karin という一組の男女の出会い（愛）の物語である。戦争をはさんだ二度の出会いのありさまが最初 Roger によって、次いで Karin によって語られる。この人物たちをとおして、従来の作品以上に痛切な孤独と肉欲の苦悩が小説の底流を支配している。この苦悩はグリーンじしんのもので見てよいただろう。たしかに、*L'Autre* は長い模索のあと、Karin として結実する実在の女性の記憶がグリーンにふと甦ったとき、本格的に着手された。²⁾ しかしこの作品成立過程はさして重要でない。*L'Autre* を制作中、*«On ne peut écrire je sans faire de l'autobiographie.»*（強調はグリーン）³⁾ と彼が書いているように、Karin なる人物は Roger とともに作者じしんの血と肉とたましいとを糧として生きているのだ。⁴⁾ むしろ Karin のほうこそ、グリーンの内心のドラマをより多く反映していると考えべきであろう。

「一種の均衡を保つためのただひとつの解決法は、書くことだ」⁵⁾ とグリーンは言い、「私の書物は自由をゆめみる四人の物語である」⁶⁾ と述べている。グリーンにおいて、創作行為が自己のうちに宿る孤独と肉体の苦悩からの「自由」あるいは解放への願いによって支えられていることはたしかであろう。また、そうした苦悩が作品に発現されることがなければ、彼の均衡をうしなわせるほどのものであることは間違いないであろう。ここから、グリーンにおける制作がカタルシスないし

は exorcisme 的な役割を果たしていることを私たちは指摘しうるであろう。

しかしながら、*L'Autre* の核心は、孤独と肉体に関する苦悩をグリーンが余すところなく語っているという点にあるのではない。重要なことは、*Moïra*、劇作 *L'Ennemi* (1954)、あるいは *Chaque homme dans sa nuit* の場合と同様、自己の統一 (unité) にかかわることがらとして、愛とは何か、〈他者〉とはなにかを、彼が問うている点であろう。もちろん、彼がこうした問いを発するのは、信仰との関連で他者=愛を敵視する見方が彼の内心におおいがたく横たわっているからだと思われる。カタルシス、ないしは exorcisme としての制作が云々できるのもここからであろう。しかし私たちは同時に、そうした見方を脱却できないにしても、乗り越えたいという彼の切なる願いがはたらいっていることを認めるべきではないだろうか。つまり、他者=愛とは何かと問うグリーンの問題意識の中には、自伝 *Mille chemins ouverts* (1964) のなかの «Je voulais tout à la fois, le monde et le ciel.»⁷⁾ という言い方から認められるように、地上への執着と天上への憧憬との両立を希求する一環として、愛を信仰とのかわりて否定するのではなく、肯定しようとする強い意図が作用しているように思われるのである。

私たちはこれらのことを本論においてあきらかにしたい。そのことのために、*L'Autre* をグリーンの同性愛の傾向、それからピュリタニズム的態度と関連させながら、また、従来の作品の流れの中に位置づけつつ、分析したいと思う。私たちはまず、*L'Autre* の構成と概要を述べ、そして語り手たちの孤独の苦しみを検討するなかで、小説の主題と問題点を把握する。ついで、作中人物たち(特に語り手によって愛される者)の肉体的苦悩という観点から、出会い(愛)の物語を考察する。以上の検討から、愛が悪であり、そして〈他者〉が悪の誘惑者であり、わざわいをもたらす者なのだというグリーン的基本的な認識が浮かびあがってくるだろう。最後に、私たちは再会後の Karin に生じた信仰的態度の変化に着目し、これを分析する。この分析によって、愛が救済の手段となり、〈他者〉が福音を伝える人であることが示されるであろう。結局、*L'Autre* の意義は、わざわい^{あか}をもたらす者である〈他者〉が福音を伝える人にもなりうるのだということを証す点にあるのではないだろうか。そして *L'Autre* はグリーンにおける他者=愛の否定から肯定への転換過程での、あるいは、他者=愛の問題をめぐる自己救済の過程でのひとつの到達点を私たちに提示しているのではないだろうか。

II

L'Autre はコペンハーゲンを舞台とし、四部に分かれているが、一人称で書かれ二人の主人公の回想形式をとる第二部の《*Récit de Roger*》と第三部の《*Récit de Karin*》が作品の大部分の頁を占めており、実質的にはこの二つから成り立っている。三人称で書かれた第一部と第四部はプロローグ・エピローグの働きをしているにすぎない。

L'Autre は、Karin の死という物語の結末を提示することからはじまる。すなわち、1949年4月21日の朝、Karin の溺死体が港で発見されたこと、そしてこの一件がありふれた自殺として処理されたことが第一部で簡単に伝えられる。時間的秩序に従うならば、この第一部は小説の最後に置かれるべきものである。第二部以下は Karin の死に至るまでの経過を解き明かす仕組みになっている。

第二部の《*Récit de Roger*》に入ると、物語の時間は第二次世界大戦開戦前夜の1939年の夏にさかのぼる。語り手 Roger がこの夏における、Karin との出会いを中心にした、コペンハーゲンでの思い出を追憶する。若いフランス人の Roger は戦争の勃発がしきりに噂される祖国を離れて、「快樂の都市」(p. 717)であるコペンハーゲンに休暇でやってくる。無神論者であり、「楽しむことが私の人生の大きな関心事であった」(p. 715)⁸⁾と語る彼は、切迫した情勢をしばし忘れたい気持ちとともに、肉のよろこびへの飽くことのない探索心にうながされて、この異国への旅を決意したのである。束の間の感覚の陶醉にひたることで、Roger は戦争の恐れと死へのおののきから逃れたいと思うのだ。しかしながら、デンマーク語を理解しない彼は、欲望とともに満たすべき相手を容易に見いだすことができない。書店を営み、同時にいくらか *entremetteuse* の役をもひき受ける謎めいた人物、Mlle Ott から紹介された女たちとの交渉の試みもことごとく失敗に帰する。このため Roger は孤独の世界に投げ込まれ、ますます肉の欲望に責めさいなまれる。自らの孤独と肉欲の苦しみについて、彼は次のように書いている。

「私は沈黙(silence)のなかに閉じ込められていた」(p. 775、強調は筆者。以下同様)。
「空腹とは別の、もう一つの飢えが私の臓腑を締めつけていた」(p. 715)。

このようなとき、Roger はフランス語を話すひとりの若い娘 Karin を偶然知る。街で道に迷い、途方にくれていたとき、不意に Karin と出会い、これがきっかけとなって二人のあいだで交際が始まったのである。愛ではなく、欲望の性急な実現を

願う⁹⁾ Roger は、Karin の気紛れな振舞いに翻弄されたこともあって、¹⁰⁾ はじめのうち Karin の存在を忘れようとするが、やがて Karin にどうしようもなく心を奪われてしまう。父が自殺し、母が発狂したため一人で暮らす身の Karin は、プロテスタントの敬虔な信仰をもつ半面、Roger と同様にアヴァンチュールをもとめて、夜ごとあやしげな場所を徘徊するという、矛盾した生活を送っている。こうした Karin にたいして、Roger は好奇心を、あるいは哀れみの念¹¹⁾をいただくのであるが、これらの感情はやがて愛の情熱へと変貌し、結晶するのである。かくして Roger は肉の苦しみに加えて、他者に執着し、従属することの苦しみを思い知る。愛の情熱に心をかき乱された Roger において、Karin とのはじめての出会いは自らの不幸を招いた、忌まわしい運命の瞬間として想起される。彼は書いている。

「もし私に選ぶことができたなら、私は彼女に眼を向けさえもしなかったらうに」
(p. 738)。

一方、Karin もまた、Roger を知ることによって深い感乱に陥る。《Je vous déteste, mais je vous aime. (...) Je ne voulais pas vous aimer. On ne choisit pas.》(p. 811) とのちに Roger に語るように、Karin は自分に接近するこの異国の男を拒否しつつも、彼に惹かれていく自分をどうすることもできない。Karin にとってもまた、《Pourquoi t'ai-je rencontré? (...) il a suffi que tu me demandes le nom d'une rue et mon sort a été fixé d'un seul coup.》(p. 811) とのちに述懐するように、Roger との出会いは自分の運命を変える決定的瞬間となる。結局、Karin はある夜、混乱のうちに Roger のもとを訪れ、彼にからだをゆだねてしまう。こののち二人は激しい抱擁の中で時間を過ごす。しかし、独ソ不可侵条約の締結によって、戦争が不可避のものとなったとき、二人の仲はひき裂かれる。Roger は別離の悲哀にたえながら、帰国の途につくのである。

第三部の《Récit de Karin》では、時間は十年後の1949年の春に移行する。今度は Karin がその春に起こった事柄を書き記す。Karin は戦時中のおこないが原因で、全く孤立した生活を強いられている。町がドイツ軍の占領下にあったとき、Karin は世間に公然と背をむけ、敵の将校たちを相手に遊び戯れ、放縦のかぎりをつくした。このため、人々は終戦後、Karin を法廷で裁くかわりに、彼女の存在を無視し、彼女に対して決して口をきかないというきびしい罰を課したのである。

「わたしは望むがままに出かけることができる。誰もわたしを見張りはしない。だが、誰もわたしを見ないのだ。まるでわたしという者が存在しないかのように。町はとりつかれている。町にはひとりの亡霊がいるのだ。そしてその亡霊とは、

わたしなのだ」(p. 816)

と Karin は言い、そしてまた、店で買いものをした際の店員の冷ややかな対応ぶりに触れて、

「ひとことの言葉さえ発せられなかった(…)。機械的にわたしはさよなら、と言った。答えは沈黙 (silence) だけだった。それも憤慨や無言の怒りの沈黙ではなく、うつろな沈黙だけだった」(p. 817)

と書いている。¹²⁾十年前の Roger がそうであったように、Karin もまた「沈黙のなかに閉じ込められて」生きているのだ。

このように徹底した孤独の中にあるとき、Karin はコペンハーゲンでの滞在を告げる、Roger からの手紙を受けとる。戦後まもなくカトリックの信仰を得た Roger は修道士になる決心をしている。隠遁の生活に入るまえに、Roger は Karin を訪ね、かつて自分のせいで Karin が信仰をなくしてしまったことのゆるしを乞い、Karin に再び信仰を見出してもらいたいと願っている。これに対して、Karin は Roger の生存を知りえて、かつて愛しあった日々の思い出とともに、Roger への愛が内心に甦えるのを、というより、彼への愛がまだ自分のなかで生き続け、はぐくまれてきたことを悟る。そして昔のように Roger との抱擁の中で生きることをひたすら望むのである。

こうして互いに異なった思感を秘めたまま、二人の再会がなされる。Karin を信仰に導こうとする Roger の意志と、Roger を愛に誘い込もうとする Karin の願いが、二人の幾度かの対面の中ではげしくぶつかりあう。このぶつかりあいのなかで、一瞬 Karin の願いが勝つ。ある夜、Roger は愛の欲望の抵抗しがたい力に動かされて、突然 Karin のもとにやってき、錯乱状態のうちに Karin のふところへとびこむ。二人は再び昔のように愛しあう。けれども、二人の関係はこの夜かぎりである。翌朝、平静さをとりもどした Roger は、コペンハーゲン在住の司祭の住所を書きつけた紙片を残して、永久に Karin のもとを立ち去るのである。Roger の出発ののち、Karin はふたたび孤独のなかに自分を見いだす。しかも、この孤独は、Karin が Roger との愛によってそこからの脱出の可能性を夢みていただけに、Karin にはなおさら深く、苛酷なものとなる。Roger との交流がまだとだえていなかったころ、Karin はすでに、Roger から離れて生きることの苦しみを、次のように書いていた。

「一人きりだった。ひとりきりでいるのがこれほど苛酷なことはかつて一度もなかった。この四年来、はじめて誰かがわたしの孤独のなかに入ってきて、そしてそこから出ていったのだ。ひとりの男が。」(p. 827)。

要するに、Roger との再会は癒やしがたい孤独感を Karin にのこしたのである。

同じころ、世間では Karin との和解の工作がすすめられる。Karin がフランス人の男と交際していたのを知って、人々は彼女の過去の行為を水に流そうとする。だが、このような世間の態度の変化は Karin の眼にはうつろなものとしてしか映らない。Karin は今までどおりに生きつづけていくことの意味を見失ってしまうのである。

エピソードの第四部は、手記を書きおえたあとの Karin の行動を描く。時間は 1949 年の 4 月 20 日の夜、すなわち、第一部の日付の前夜である。Karin は夢遊病者のように家を出る。港のところで、二人のならず者たちが Karin をつけねらう。Karin は逃げる途中、誤って海に落ち、波にさらわれてしまう。こうして Karin の死の真相が明かされる。つまり、第一部で伝えられているように、人々は Karin の自殺を信じるが、ほんとうは事故死であることが知らされるのである。

以上が、*L'Autre* の構成と要旨である。ここでただちに気づくことは、この小説の中心部分をなす、第二部・第三部の二人の主人公の手記が内容的に著しく類似しているという点である。それらは異なった時代の出来事を報告しているとはいえ、結局のところ、孤独のなかでの〈他者〉との出会いという同一の体験ないしは主題を繰り返しているにすぎない。二人の語り手が置かれた状況は等しい。1939 年の Roger は語学力のなさによって、49 年の Karin は戦争中の振舞いのために、世間から完全に孤立している。二人のいうように、彼らはどちらも「沈黙」のなかで生きている。言い換えれば、語り手たちはあたかも牢獄に閉じこめられたかのように、あるいは、砂漠のなかをさまようかのように、孤独な自己を生きているのだ。このようなとき、彼らは〈他者〉と邂逅するのである。〈他者〉とはもちろん、Roger にとって Karin であり、Karin にとっては Roger であるが、一般化していえば、それは孤独の解放者となるべき、愛の対象としての存在である。

しかしながら、*L'Autre* において、この〈他者〉は語り手たちの孤立した状況を必ずしも打開していない。内心の思いを伝えようとする積極的な姿勢に欠けるがゆえに、むしろ彼らは〈他者〉との出会いを体験することによって、かえって内的な混乱におちいり、より痛切な孤独意識をもつにいたるのだ。グリーン最初の創作作品である、*Christine* の語り手 Jean は美しい少女 Christine との愛の出会いの場面をかえりみて、*«ma solitude jadis tranquille, maintenant insupportable»*¹³⁾ と述べているが、同様のことばは *L'Autre* の二人の人物もまた繰り返して言いうる

であろう。*L'Autre*においてもまた、〈他者〉は語り手たちを孤独な現実から解放するどころか、逆にこの現実を浮き彫りにする役割をはたしているのだ。たしかに二人は愛のまじわりのひとときをもつにしても、しかし彼らは究極的に別離の辛酸をなめることで、再び孤独の世界に投げかえされてしまうのだ。二人の語り手にとって、〈他者〉との出会い・交流・別離の体験は、自己の孤独性を確認する過程にはかならない。とりわけ49年のKarinにおいて、それがめだっている。それゆえ、*L'Autre*とはまず、〈他者〉との出会いを契機とした、孤独の深化の物語なのである。

この点において、*L'Autre*はChristine以来のグリーンの作品の延長線上に位置づけられる。孤独のなかで誰かとめぐりあい、その誰かに執着し、そして執着するがゆえに一層孤独にならねばならない人間の苦悩——これは作家グリーンが執拗なまでに追求しつづけてきた問題なのである。実際、私たちは彼のどの小説、どの劇作をとっても、恋愛的状況が描かれているのを見出す。しかしながら、その状況の多様さを越えて共通することは、愛が作中人物の孤立の対立物としてありながら、しかるべき発現がなされないがゆえに、かえって孤独感・断絶感をいやます源泉にしかならないという点である。愛はグリーン作品のなかで、通常の意味において成就しない。それはほとんどいつも対象との交流のないところで生きられる、不可能な・告白されない愛なのである。¹⁴⁾そして多くの場合、〈他者〉との出会いの場面は作品の冒頭におかれて、主人公のドラマを導き、暗く陰惨な結末をもたらすきっかけとなっている。すなわち、作中人物は出会いを発端として内的混乱におちいり、孤独の苦悩から、あるいは、〈他者〉との断絶のなかで不毛な情熱をもつことの絶望から、悲惨な末路をたどるのだ。*Adrienne Mesurat* (1927)の中のAdrienneの発狂、*Léviathan* (1929)におけるGuéretのサディズム、*Sud* (1953)のIanの自殺、*Le Malfaiteur* (1956。新版1973)のHedwigeの自殺、これらはみな〈他者〉との出会いによって誘発された結果と見ることができよう。このようにグリーン作品の世界は〈他者〉との出会い、それも孤独を深化する出会い、という同じ体験ないしは主題を根底にすえて構築されているのである。¹⁵⁾

このことに関連して、グリーンが同性愛の傾向をもつことは視野のうちに入れておく必要があるだろう。同性愛は世間にはばかる性格をもち、対象への通常発現、対象との自然な交わりを禁じるがゆえに、痛切な孤独意識、他者からの断絶意識をもたらすモチーフとなることはいうまでもない。とくにこの傾向とからんで、グリーンが青春時代に補填しようもないほど苛烈な出会い(愛)の体験をしたことを指

摘しなければならぬ。自伝 *Terre lointaine* および *Jeunesse*¹⁶⁾ で回想されているような、ヴァージニア大学留学時代の学友 Mark との出会い、および愛の体験がそれである。この学友への愛はグリーンが自覚的に生きた最初のものであった。そして留学当時をかえりみて、「アメリカ、それは Mark だった」¹⁷⁾ と彼が語り、また Mark について、「この世で生命よりも貴重だった、ただひとりの存在」¹⁸⁾ と述懐するほど、この愛は熱烈だった。しかしながら、その愛は対象が同性であるため、終始秘密と沈黙のなかで生きられる、不可能な・告白されない愛だったのである。グリーンがこうした発現と交流のない愛の情熱をもつことで、深刻な孤独感・断絶感をいだいたことは容易に想像される。彼は苦悩と絶望のなかで、他者が「遙かなる存在」¹⁹⁾ であること、自己と他者との間には狭めようもない距離が介在するのだということを理解するのである。

グリーン作品における〈他者〉との出会いという主題は、多くの研究者が指摘するように、²⁰⁾ こうした過去のきびしい挫折の体験から生まれたのである。グリーンもまた、1970年の日記の中で、この体験によって蒙ったこころの「傷口」に言い及んで、自分が「この傷口から全作品において絶望のうたを歌った」²¹⁾ ことを認めている。したがって、私たちはグリーン作品が、同性愛の傾向をもつことで、他者からの隔絶を運命づけられた彼の内心の世界を表出していると見て差しつかえないであろう。そしてグリーンは愛する作中人物たちをとおして、ひとりで生き続けなければならないことの彼じしんの苦悩と、孤独であるからこそ誰かを愛し、愛を追い求めないではいられない彼じしんの心の痛みを吐露していると言えるのではないだろうか。

このことは *L'Autre* に関しても同様である。この小説では例外的に愛のまじわりのひとときが見いだされるとはいえ、先にも述べたように、そのひとときの体験が主人公たちの孤独感をいやましており、さらには、一人称による表現形式が採用されることで、他者との断絶からくる苦悩と絶望はいっそう鮮明に表現されている。その意味で、*L'Autre* はグリーンの内なるドラマを他の作品群にもまして浮き彫りにしていると考えられるのである。

L'Autre において、手記を作成する Karin は、《Pourquoi j'écris ceci? Parce que je me sens moins seule quand j'écris.》(p.817) と自問自答している。このことばはグリーンにおける創造の意味を解き明かしているであろう。つまり、作品とは彼にとって自らの孤独の苦悩の発現の場にほかならない。そしてこの苦悩を作品に移し入れることによって、彼がそこからの解放を目指し、内部の「均衡」

をかりて保ち得ていることはたしかであろう。それゆえ、*L'Autre*を含めた作品の制作がカタルシスないしはexorcisme 的な価値を有することは言えると思う。²²⁾

しかしながら、*L'Autre*に問題を限定するとき、〈他者〉との出会いという主題が上記のことを踏まえてもう少し深いところであつかわれていることに私たちは気づく。すなわちその主題はこの小説では宗教との関連で追求されているのだ。第二部において、愛するRogerが無神論者であるのにたいして、愛されるKarinはプロテスタントの信仰をもっている。第三部においては、愛するKarinが宗教から遠ざかっているのにたいし、愛されるRogerは回心し、カトリックの修道士を目指している。つまりこの小説では、語り手の〈愛〉に対峙するかたちで、語り手によって愛される者の〈信仰〉が置かれており、二人の愛（出会い）の物語は宗教との確執のなかで進展しているのである。見方によれば、この確執はグリーンの内心の奥深い領域における二つの自己、すなわち、地上的なもの・人間的な愛を希求する自己と、霊的なものを憧憬し、神への愛に生きる自己との対立をそのまま形象化するものとして受けとることができるであろう。要するに、それはこの世に執着するグリーンと信仰者グリーンとの対立をあらわしているように思われるのである。

したがって、*L'Autre*におけるグリーンの関心は「絶望のうた」を歌うこと自体に、あるいは、孤独のなかで他者=愛を追いもとめることの苦悩を語るという点にたいにあるのではない。重要なことは、そうした苦悩が信仰もしくは宗教的な救いとどのようにかわるのかという点であって、グリーンの作家意識もまたこの一点に集中しているように思われる。言い換えれば、それは信仰的視点に立つとき、他者=愛とはいったい何なのか、という問いなのである。そしてこれは、終生信仰をもちつつも、²³⁾ 同性愛の傾向を有することで、他者=愛の問題についての深刻な苦悩を知らねばならなかったグリーンにとって、自己の統一 (unité) と自己の全体的な救済にかかわる重大な問いだったのでないだろうか。*Moira*以降のグリーンの作品、ことに*L'Ennemi, Chaque homme dans sa nuit*はこの問いによってつらぬかれている。これらの作品においてもまた、〈他者〉との出会いという主題は宗教との関連のもとにあつかわれている。*L'Autre*はそれらの作品を踏襲し、そこで提起された問題を発展させたものにほかならないのである。

Ⅲ

ところで、作家グリーンが他者＝愛の問題をとりあげなければならなかった要因として、同性愛の傾向とともに、彼の内心に根強く宿る肉体・肉欲への恐怖をどうしても指摘する必要があるだろう。グリーンは日記のなかで「私は性の本能を憎む」²⁴⁾といい、「私はいつも肉欲のない生を夢見てきた」²⁵⁾と書いている。また、自伝 *Partir avant le jour* (1963) においては、「肉体、それは無秩序であり、人の顔を暗くする恐ろしいものであった。今日でもなお、人間をその全能の気まぐれに隷属させずにはおかないこの冷酷な力を、私はなんと憎んでいることだろう」²⁶⁾と述べている。こうした肉なるものへの反撥はもちろんグリーンにおいて、信仰との関連で自己の純粹さを希求し、罪との非妥協的なたたかいを目指すピュリタニズムの態度と表裏一体をなしている。

上記のことに關して、グリーンのお兩親がアメリカ人の敬虔なプロテスタントの信者であったこと、²⁷⁾ そしてとくに母親が肉体と性の問題についてきわめて潔癖な性格の女性であったことの影響は無視できないように思われる。周知のように、プロテスタンティズムは肉体と罪とを結びつける一方、たましいを肉体から可能なかぎり切り離し、これを純化しようとする傾向にあるからだ。²⁸⁾ この靈肉分離の傾向は、グリーンのお母親の場合、実の弟が女中との関係から恥すべき病を得て、これがもとで癡人同様となって死んだという事実によって、一層助長されていた。母は十一歳の息子ジュリヤンの裸体を見て、≪Oh, que c'est donc laid!≫²⁹⁾ とつぶやくほど、肉体への極端な不浄感・嫌悪感をいだいていた。当然のことながら、母は息子にたいして厳格なしつけを課すのであって、たとえば、≪Si tu devais commettre une mauvaise action, j'aimerais mieux te voir mort, comprends-tu? Mort à mes pieds.≫³⁰⁾ と言いさえもしたのである。幼時期の人格形成にたいして、母親が大きな役割をになうことは指摘するまでもない。グリーンは母からその厚い信仰とともに、肉体的なことがらへのきびしい姿勢を受け継いだのである。彼のピュリタニズムの態度は母の影響のもとで、すでに幼年時代から培われたのである。

そしてこの態度は、グリーンが同性愛の傾向をもつにいたることで、さらに強化されたのだと考えてよいであろう。³¹⁾ なぜなら同性愛の欲望は男女間の愛の欲求のように正当化される余地³²⁾を一切もたず、あくまでも罪としてとどまるがゆえに、この傾向をもつことで、自らの肉体の要求への罪の意識は二重の意味ではたらくだろうし、肉なるものを拒絶する仕方それだけはげしいかたちをとらざるを得ない

からである。こうして肉体・肉欲の恐怖は終生グリーンの内心を支配することになったのである。

グリーンの中人物たちはこうした彼の肉なるものへの反撥を多少とも共有している。前章で述べたように、愛がほとんどいつも不可能な・告白されないかたちをとり、孤独感・断絶感をいやすエネルギーにしかなりえないのは、人物たちの内心に肉体的な愛へのおそれが、言い換えれば、肉体を含めて愛すること、あるいは欲望の現実に直面することのおそれがひそんでいて、このおそれが対象への接近、対象との交流のこころみをはばんでいるからでもあろう。実際、愛の対象とは同時に欲望の対象でもある。しかし肉体的なことがらへの恐怖をいざととき、その対象が「遙かなる存在」にしかなりえないのは当然のことなのである。したがって、他者から隔絶して生きることのグリーンの苦悩は彼のピュリタニズム的態度とも深いかわりを有しているといえよう。

しかしながら、このピュリタニズム的態度は孤独という感情的次元での苦悩をもたらす要因になるだけではない。さらに重要なことは、その態度が肉体的なレベルでの苦悩をもひきおこし、肉体とたましい、欲望と宗教、ひいては愛（人間への愛）と信仰（神への愛）との深刻な対立を内部で生じさせるという点であろう。*Moira*以後の作品のなかでグリーンが問題とするのは、まさしくこの点にほかならない。とくに*Moira*においては、「肉体はキリスト教徒の敵」³³⁾だと考える主人公 Joseph をとおして、ピュリタニズムに生きる人間の極限のすがたが描かれている。Joseph は自分のからだに触れられることをおそれ、これに目をやることすらも拒否する。このような姿勢は *L'Ennemi, Chaque homme dans sa nuit* の主人公にも共通する。そしてその姿勢が彼らの内心の葛藤のドラマを導く基盤となっているのである。

L'Autre の主人公たちもまた、*Moira* の Joseph と同じように、肉体を敵視する態度をとっている。もちろんこの態度がはっきりと認められるのは、信仰に生き、語り手によって愛される 39 年の Karin と 49 年の Roger においてであるが、宗教に反撥を示す第二部の語り手 Roger からもそれはうかがえる。そしてこの小説においてもまた、その態度が痛切な肉の苦しみとともに、深刻な葛藤のドラマを彼らの内心にまねいている。私たちは以下において、二人の主人公の肉欲の苦悩という点に照準を当てて、もう一度彼らの出会い（愛）の物語を検討し、そして今度は語り手にとってではなく、信仰をもつ 39 年の Karin および 49 年の Roger にとっての出会いの意味を考察してゆきたいと思う。

第二部において、Rogerとの出会い以降、Karinは愛と信仰との相剋に喘ぐ。Rogerにたいして《J'ai faim et soif. J'ai faim et soif d'amour. Je suis perdu, Roger.》(p.790)といい、そして《J'aime ce qui me détruit.》(p.791)と打ち明けるように、Karinは人間的な愛を渴望しながらも、それが宗教と相容れないもののように思われ、不安と動揺の日々を過ごす。Karinにとって、愛と信仰との両立・調和はあり得ない。それどころか、愛は宗教的な意味での破滅をもたらしかねないものとして認識されているのである。

いったい、こうした認識はなにゆえに生まれるのであろうか。それは肉なるものを敵視し、忌避するピュリタニズム的態度がKarinのなかにあるからにほかならない。すなわち、この態度が人間的な愛を肉体の欲望と同一化させ、これを罪としておそれさせているのである。事実、Karinが《J'ai faim et soif d'amour. Je suis perdu, Roger.》というとき、彼女の意識の中では、「愛」(amour)なる言葉はほとんど欲望あるいは罪の同義語と化しているように思われる。

しかしながら、このように肉なるものをことさらに忌避する態度こそが逆にKarinをさまよわせる根源となっているのだ。なぜなら、肉なるものは排斥と恐怖の対象となることで、意識のなかではかえって浮き彫りにされる結果となり、肉のわずかな暗示にさえ、敏感にならざるを得ないからだ。つまり、たえず肉の魅惑に身をさらしながら、なおかつこの魅惑とたたかわなければならなくなるのである。けれども、それは欲望に従属すること以外のなにもものでもない。肉の欲望に屈しまいとするほど、この欲望に心を奪われるものはないからである。実際、肉の欲望を制圧しようと欲することじたいがその欲望の糧となる。そして欲望は禁じられることで、内部で膨張し、肥大し、その力を蓄積するのだ。これは欲望の普遍的なメカニズムではないだろうか。KarinがRogerと同じように快樂の温床となる夜の街や公園や港を彷徨うとき、彼女は制禦を越えた肉の奥深い力に揺り動かされているのであろう。《Je cotoie la flamme sans jamais m'y brûler.》(p.811)とKarinはいう。かくして、Karinは肉に反撥しつつもこれに執着し、欲望をこぼみながらもこの欲望にとりつかれるのである。

肉なるものへの反撥の姿勢はいくらかRogerにも共通する。すでに述べたように、Rogerは1939年、肉の快樂を追い求める墮落した人間である。しかしながら、欲望のおもむくままに行動するこの男のなかにもまた、人間の肉体的現実にたいする抑えがたい嫌悪の念が宿っているのだ。ある夜、見せ物が催された公園に大勢の人々がつめかけたとき、快樂の獲物をあさるRogerは貧婪な眼をして群衆のなかを分

け進む。このときの心の動きを彼は書いている。

「肉欲の要求がまもなく再び優勢になった。私は再び捜し始めた。というのも私は捜すためにそこにいたからだ。(…)自分が欲しているものを私は知っていた。というより自分が欲していないものを、といったほうがよいのかもしれない」(p. 718)。

この一節は、肉の現実を前にして Roger が二重の反応を示すことをうかがわせる。「欲しているもの」は同時に「欲していないもの」であるという言い方からわかるように、肉なるものは Roger にとってさえ執着の対象であるとともに忌避の対象ともなっているのである。

このことは、次のような Roger の奇妙な挙動からも明らかであろう。すなわち、淫欲が支配する暗闇の庭園を散歩中、ひとりの若い女が Roger に近寄ってきて、からだを彼にゆだねる。しかし Roger は激しい嫌悪感におそわれ、女から逃げ去るのだ。「私は悪徳を愛していた。だが、私の中にはあらゆる分析の手をのがれる、いくつかの突然の拒否があったのだ」(p. 736)と彼は説明している。つまり Roger は「悪徳」に加担しながらも、その「悪徳」に溺れ切ることができない型の人間なのである。しかしそのことで Roger はますます肉欲のとりこ化するのである。

第二部において、Roger は信仰をもたない。「宗教は私に本能的な嫌悪をよびおこすのだった」(p. 739)と彼は言い、「人間が自分のうちに神と呼ぶまぼろしの畏怖を養うことを、私は容認できなかった」(p. 797)と書いている。けれども、この信仰心の欠如は必ずしも、Roger が宗教から縁遠いところに位置することを意味しない。「私は幼年時代の神秘的な躍動 (élans mystiques) のあと自由の身になったことをよろこんでいた」(p. 801)と述べているように、Roger にもまた永遠的なもの・絶対的なものを憧憬した時代があったのであり、1939年の時点でさえ、見えないもの・神秘的なものの誘引はしばしば感じとられているのだ。³⁴⁾ したがって、Roger における宗教への反撥、神の存在の否認は、欲望に責めさいなまれた自己を弁護するための試みと見ることができよう。言い換えれば、もし神の存在を肯定すれば現在の自己を否定・断罪しなければならなくなるがゆえに、Roger は無神論者の立場にたっていると考えられるのである。ということはすなわち、Roger が過去において肉とのたたかいを経験し、このたたかいが現在の肉の苦しみとともに彼のたましいの衰弱をもたらしたことを意味する。それゆえ、Roger においても見出される、肉なるものへの執着と反撥の交錯はピュリタニズムの態度の残滓であり、そして彼の現在の肉欲はこの苦悩の所産だといえるのである。

このように肉なるものにたいして類似した反応を示し、同じように欲望に揺り動かされた二人が出会い、愛しあうとき、二人の愛がどうしても宗教と敵対したかたちをとらざるを得ないことは当然である。Karinにとって、Rogerの愛に応えることは肉欲に同意すること、罪を犯すことでしかないがゆえに、彼女は自己の信仰をまもるために、Rogerへの愛をしりぞけようとする。それは感情次元の問題ではなく、自らのたましいの救いにかかわる問題であり、肉とのたたかいを意味するであろう。一方、Rogerにとってもまた、愛と信仰との和解・両立はあり得ない。Karinの信仰を生かすことは自己の愛ひいては欲望の断念につながるがゆえに、その実現の「障害」となっているKarinの宗教を、Rogerは破壊しようともくろむ(p.792)。こうした二人の関係のなかでは、Rogerなる存在は愛する者という範囲を越えて、悪の誘惑者という悪魔的な性格を帯びるにいたるであろう。事実、内心の葛藤の果てにKarinが肉の衝動にかられてRogerの部屋を訪ねてきたとき、二人のあいだで次のような会話がかわされるが、そのくぐりには、Karinのたましいの視点に立てば、Rogerが自分の愛するKarinを征服しようとする場面としてよりも、悪魔がRogerというひとりの人間を介してKarinを誘惑し、神から彼女を引き離そうとする場面として読みとったほうがふさわしいほどなのである。

«Pourquoi me regardez-vous? demanda-t-elle (=Karin).

—Je (=Roger) regarde quelqu'un que je ne connaissais pas jusqu'à cette minute — et qui me déteste.

—Comprenez-vous pourquoi?

—Oui. Vous avez beau dire, vous me croyez dangereux. (...)

«Dangereux pour qui? demanda-t-elle enfin.

—Pour cette foi que vous portez comme un fardeau qui vous empêche d'avancer, Karin, qui vous empêche de vivre. (p.810)

結局、Karinは誘惑に屈し、信仰と訣別する。日曜日、Rogerが教会へ行くようにと気休めにすすめても、KarinはRogerのそばを離れようとしない。Rogerとの抱擁の中で、彼女は一切を忘れようとする。欲望は堰を切り、氾濫する。「そのとき、彼女が自分に属していなかったのと同じように、私もまた自分に属していなかった」(p.813)とRogerが語っているように、KarinはRogerとともに、錯乱にも似た性のよろこびに酔い痴れるのである。それは、たたかいに敗れたKarinの絶望的な自己放棄の姿勢をあらわしているかもしれない。おりからヨーロッパは戦争の勃発という危機に瀕している。いわば崩壊に向かって刻々と動いている。この外

部世界の情勢は Karin の内部世界の状況と照応しているのではないだろうか。すなわちそれは、彼女の内なるたましいが滅びへの道を歩んでいることを象徴化しているのではないだろうか。かくして 1939 年、Roger (=愛) は Karin における信仰とたましいを粉碎しつつ終わるのである。

こののち、Karin は悲惨な人生を送ることになる。Roger との愛によって肉のよろこびを知った Karin は、孤独な生活にもどったとき、以前よりもさらに痛切な肉の渇きにおそわれる。コパンハーゲンの町がドイツ軍の占領下にはいったとき、Karin はこの渇きを癒やすため、敵の将校たちと無差別な性の交渉をもつ。あるいはまた、戦争がおわった 46 年の春のある夜、Karin は欲望を満たすべき相手を捜し求めて、海の男たちが集まる港の酒場に立つ。そして酩酊した男のひとりをつかまえ、物乞いをするかのように抱擁をせまるのである。このような Karin の行為は、金銭的な必要からではなく、肉体的な要求からなされている³⁵⁾ だけになおさら凄惨な印象を与える。結局、1939 年における Roger との出会いは(愛)は、信仰の代償として、肉欲への服従を Karin にもたらしたのである。十年後、戦時中の Karin の振舞いを知って、ゆるしを求めにやってきた Roger が、*«J'ai éveillé en vous une sensualité dormante. Si vous ne m'aviez pas connu, vous n'auriez peut-être pas agi comme vous l'avez fait.»* (pp. 881 - 2) と Karin に語る時、彼は正しい。Karin の信仰も、Roger との邂逅がなければ守られていたのかもしれない。神を見失ったことについて、Karin は Roger に、*«Je me suis libérée, grâce à vous. (.....) Si je vous suis reconnaissante quelque chose, c'est bien de cela.»* (p. 839) という言い方をする。しかしこの言い方は現在の自己を正当化するための詭弁でしかない。信仰の放棄は決して解放とはなっていない。なぜならその放棄とともに、Karin は肉欲という新たな鉄鎖につながれたのだから。Roger との別離後のこうした悲惨な在り方からも明きらかなように、Karin にとって、他者=愛とは地上的にも宗教的にも自己を破滅に導くものにほかならないのである。

第三部において、再会後の二人の愛も 1939 年のときと同様に宗教と対立したかたちをとる。二人の立場は逆転するものの、彼らの関係は十年前と類似したいきさつをたどる。今度は Roger が内心の葛藤を生き、Karin が Roger の信仰とたましいを攻撃する役になうのである。信仰を得、自己の救済をはたした Roger は Karin を、自分がかつておとし入れた悲惨から救い出そうとする。けれども Karin はもう地上的な見地しかもてない。それゆえ、39 年の Roger がそうであったように、

Karin は自己の愛と欲望の成就だけを待ち望む。このような Karin との逢い引きをつづけていくうちに、Roger は過去にいただいた恋愛感情がよみがえるのを覚え、今回のコペンハーゲン滞在の真意が、Karin にゆるしを求め、彼女に信仰をとりもどさせることにあるのではなく、≪J'étais fasciné par l'amour, par l'amour charnel, même au plus fort de mes élans vers Dieu.≫ (p.900) とのちに告白するように、Karin を愛し、欲する気持ちに根ざしていたのではないかと考えるにいたる。先にも述べたように、Roger は信仰のない 39 年の時点でさえ、肉なるものに反撥する姿勢を示していた。回心した彼にピューリタニズム的態度が復活することはいうまでもない。Roger の内部でもまた、かつての Karin の場合と同じように、愛は欲望=罪と同一化され、愛と信仰、肉体とたましいの相剋がくりひろげられる。そしてこの相剋のなかで、今度は Karin が悪の誘惑者としての地位をしめ、悪魔的な存在へと変貌するのだ。Roger と Karin とが対峙するつぎの場面からは、≪Le regard était vide.≫という言い方をおして、Roger の内なるたたかいを垣間見るとともに、Karin のそうしたすがたが浮かび上がってくるのである。

≪Roger, dis-je (=Karin) tout à coup, pourquoi ne me regardez-vous pas? Avez-vous peur de moi?

—A quoi songez-vous, Karin? Serais-je ici si j'avais peur de vous?≫

Il me considérait maintenant droit dans les yeux, comme pour me mettre au défi, mais au fond de ces magnifiques prunelles je ne pus rien lire que la volonté de ne pas me voir: le regard était vide. (p.881)

けれども、Roger もまた、肉とのたたかいを生きること、ますます激化する欲望に呻吟する。Roger はコペンハーゲンからの出発を決意する。しかし肉に呪縛された彼はそうすることができない。夜になると Karin の家のあたりをうろつき、ついに混乱のなかで Karin のもとをおとずれ、あやまちを犯してしまうのである。こうして 1949 年においてもまた、愛は信仰に対して勝利をおさめる。ただ十年前と異なるのは、迷いからさめた Roger が Karin と永遠の別れを告げ、町を立ち去るという点である。それはおそらく、かつての Karin と同じ轍を踏むまいとする意思が強くはたらいたからにちがいない。Karin とこれ以上あやまちを重ねることで、自分の信仰とたましいの救いが危険にさらされるのをおそれたからであろう。

1949 年の Roger にとってもまた、他者=愛は自己の破滅をもたらすものにほかならないのである。

以上のように、私たちは *L'Autre* における出会い(愛)の物語を、ピューリタニス

ム的態度に基づく肉欲の苦悩と関連させながら、信仰をもつ1939年の Karin、49年の Rogerの側に立って分析してきた。ここで言えることは、肉とのたたかいの中では、愛が破滅をひきおこすものとなり、〈他者〉が悪の誘惑者という悪魔的な性格を帯びるにいたるという点である。

これらは他者=愛にたいするグリーンの基本的な見方を示すものと考えてよいであろう。そしてこの見方はピュリタニズム的態度を有することで彼じしんが背負った肉体の苦悩の体験に裏づけられているのではないだろうか。L'Autreを制作中、グリーンは日記のなかで、この小説に表現された「青春時代の肉欲の陶醉」について触れ、「私はそれを、たましいと肉体が麻痺するほどまでに知った」³⁶⁾と書いているが、RogerやKarinと同様、彼もまた肉体の抵抗しがたい力に支配されねばならなかった。彼の場合、ピュリタニズム的態度は同性愛の傾向によって強化されているだけに、肉体の苦悩はいつそう苛酷なものであったように思われる。たとえば、Jeunesseにおいて告白されているように、留学生活をおえて帰仏後の彼は夜になると、美しい若者との快樂をもとめて、パリの街なかをさまよい歩き、³⁷⁾さらには、曖昧なホテルの薄ぎたない一室で、名前をもたない男と、嫌悪と錯乱のうちに肉の交わりを結ぶことさえもあったのである。³⁸⁾

このような肉の懊悩は当然のことながら、グリーンに宗教に重大な影響をおよぼすことになる。1924年、グリーンはこの世への執着によって衰えつつある信仰をひきとめるために、Pamphlet contre les catholiques de Franceを作成する。彼はこの書のなかで、習慣に墮落した、微温的な信仰を弾劾し、³⁹⁾これと対置させるかたちで、狂気に至るほど熾烈な情熱に支えられた信仰、⁴⁰⁾地獄へのおそれと救済への願いに終始つらぬかれた信仰⁴¹⁾を主張し、開示する。だが、このような fanatiqueな信仰は罪とのさらにはげしい争闘を要求する。肉体とたましい、欲望と信仰との相剋の過程で、グリーンは1929年頃、カトリック教会から完全に離反し、⁴²⁾39年の復帰の時点まで宗教的実践を放棄するのである。

しかしながら、グリーンにおける肉の問題の深刻さはこうした伝記的事実によってよりも、彼の作品群の存在によって証^{あか}されるのではないだろうか。他者との断絶の中で生きる人物たちをとおして、抑圧されたものと烈しいものとが交錯する作品世界の濃密な雰囲気は、グリーンの内心をそのまま投影するものと見るべきであろう。1930年代からの小説のなかで、現実世界からの脱出が本格的にくわだてられ、ことにLe Visionnaire (1934), Minuit (36), Varouna (40), Si j'étais vous... (47)が幻想あるいは非現実への傾斜を見せるのも、ひとつには、肉体を

もつことに因る自己の苦しい現実から解放されたいという強い願いがグリーンのかなかにあるからにほかならない。さらに、*Moira* 以後、葛藤のドラマが作品であつかわれるという事実は、39年の回心によっても肉の問題が解決されなかったこと、肉との苦闘がより激しいかたちで継続されたことを物語っているであろう。グリーンは「制禦しがたいこの肉体の飢えに、もし私が支配されていなかったら、私は全くちがった作品を書いていたことだろう」⁴³⁾と述べている。彼にとって、作品とは肉欲の苦悩の発現の場としてもあるのだ。そして「肉体的人間は霊的人間とともに生きる。一方は他方の喉を掻き切ろうとしているのだ」⁴⁴⁾という彼の見解を考慮に入れるとき、その苦悩は書くことによって発現されることがなければ、たましいを殺し、人生を破滅に導くほどのものであったように思われるのである。グリーンにおける制作がカタルシスあるいはexorcisme的な意味をもつことはここからも確認することができよう。

このように、内なる世界が肉の悩みに浸潤されているとき、他者=愛にたいする見方が否定的なものとなることはいうまでもない。私たちは前章において<他者>が孤独を深化させるものであることを見た。この点で、愛することは不幸である。だが同時に、<他者>は肉の苦しみを痛切にし、信仰と救いを危機にさらす存在なのだ。グリーンにおいて、愛は悪にほかならない。そして<他者>はあらゆる意味でわざわざをもたらす人なのである。*L'Autre*もまた、彼のこの基本的な認識にもとづいて成り立っているのである。

IV

それにしても、*L'Autre*における出会い(愛)の物語のなかで、第三部のKarinの在り方には問題がのこる。1939年、Rogerとの愛によって信仰を失ったKarinは、十年後の再会によって、さらに激しい執着に心を引き裂かれてしまう。一方、RogerはかつてKarinを宗教からひき離すことで自己の愛と欲望を実現しながらも、改宗ののちは、自己の信仰と救済への気遣いから、Karinとの関係を断ちきるだけの気力をもつ。二人を対照するとき、Rogerの強さにたいして、Karinの弱さが目立つ。Karinとあやまちを犯したことによって、修道士になることの希望は捨て去るものの、Rogerがやはり救いへの道を歩んでいることは間違いないであろう。けれども、作家グリーンがより深い共感とあわれみのまなざしを投げかけているのは、信仰(神への愛)のために人間への愛を犠牲にし得たRogerではなく、信仰を見失うほ

どまでに人間的な愛に溺れてしまった Karin の方ではないだろうか。実際、Karin の救いのためにやってきながら、Karin と罪におちいり、そして Karin の苦悩をいわば踏み台にして出発する Roger の態度は、見方によれば、傲慢にもうつりかねない。Roger は自己の行為と、自分の出現が Karin にひきおこす苦しみを予見すべきであったし、彼じしん語っているように、コペンハーゲンへ決して戻ってくるべきではなかったのかもしれない (p. 900)。これにたいして、Karin が Roger と再びめぐりあうことによって、Roger への愛にすべてを託し、戦争によって奪われた彼との幸福を取り返したいと願うのは、孤独な Karin の生活を考慮するとき、自然の成り行きのように思われるのである。

L'Autre における作家グリーンの大きな関心は、Karin の救済の問題であろう。すなわちグリーンがこの小説において問おうとするのは、この世への執着のために信仰をうしない、暗闇の中にさまよい込んだ Karin もまた、どうして Roger とともに神のゆるしを受けてはいけないのか、Roger が救われるのならばどうして Karin もまた救われてはいけないのか、むしろ Karin の方にこそ神からの愛は多くそそがれるのではないのか、という点であろう。そしてこの問いはとりもなおさずグリーンじしんの全体的な救済と深くかかわっているのではないだろうか。事実、Karin が乗り越えがたく感じる地上への愛着はグリーンの内心から由来するものであることは確かなところであるし、この愛着に起因する Karin のたましいの混迷も、彼じしんが遭遇したかもしれないものであることは疑いをいれない。つまり、Karin の救済は作家グリーンの切なる願いとしてあるのではないだろうか。現に、この願いに影響されて、Karin のたましいは Roger の出発以後、微妙な曲折を経ているように思われる。それゆえ、これ以後の Karin の生の軌跡を、彼女の信仰への態度を吟味しつつ、少し仔細にたどっていくことが必要になってくるのである。

すでに述べたように、Karin は Roger との関係を断たれたあと、生きることの意味を見失う。幸福の享受の可能性が望み得なくなってしまった Karin には、すべてが空虚なものに思われる。そして孤独と倦怠のなかで生きることが、堪えがたい重荷として感じられるのだ。彼女は自分の挫折した人生について書いている。

「わたしはいつものように家にいた。部屋を一瞥するだけで、わたしにはすべてがもと通りの場所にあることが確かめられた。わたしは変わった。しかし倦怠と挫折の装飾にさえ思われる、この部屋の飾りは変わらなかった。それはわたしの人生を、わたしの失敗した人生を語っていた。わたしは自分の人生をもはや望まなかった。もう自分を望まないのと同じように。」 (p. 920)。

このように生きることに疲れた Karin は、しだいに死の想念にとりつかれていく。父が自殺した港の、眼下に海を見おろすところへ、Karin はしばしばおもむき、父がそうしたように海に身を投げることによって、自己と自己の生から永久に逃れ去りたいと思う (p.884, 972)。だが、Karin はそうするだけの勇氣を持ってない。寸前のところで躊躇し、後退し、再び日常の無価値な生活に舞いもどっていくのである。

こうした中で、Karin はなんとか生きる意味と理由を見出そうとして、Roger が置いていった紙片を頼りに、コペンハーゲン在住のカトリック司祭をたずねる。

Roger との交流がとだえていなかったころは、地上的な幸福だけを追いもとめていたのであるが、それが期待できなくなったいま、Karin は Roger のところと人生を支えている信仰を自分もまた手に入れようとするのだ。そうすることが Roger の悲願でもあったし、それに Roger を知る以前には、彼女じしん信仰によって生きていたからである。Karin のなかで、信仰心は完全に消滅したわけではなかった。「わたしがいくら信仰を失ったといっても無駄であった… (…) 幼年時代にさかのぼりさえすればよかったのだ」 (p.848) と書いているように、幼年時代の追憶は彼女にとって宗教への回帰を意味するのだから。したがって、宗教によって心の空虚を満たそうとする Karin の試みはけっして唐突ではないのである。

かくして、司祭とのやりとりが Karin の死の間際まで続けられることになる。けれども彼女は決定的な回心に導かれるまでには至らない。Roger のような強固で揺るぎない信仰と、そしてそこから生じるはずのこのころの平和とやすらぎを得るにはいたらない。宗教に帰依することが閉塞した状況を切り開く、残された唯一の道だとは考えつつも、Karin は安易なかたちで信仰をもつことへの深い疑念にとらえられ、また、司祭によって型通りに事態が運ばれていくことに強い反撥をおぼえるのである。⁴⁵⁾ そしてさらには、自己の孤独で悲惨な現実への熟慮反省は宗教によって問題を解決しようとする意欲すら Karin からうばってしまい、激しい絶望感におとし入れるのである。このように、Karin は一方では死への願望をいだきつつも死を敢行できず、他方では宗教への接近によって生存のための手がかりを見いだそうとしながらも、宗教に幻滅し、絶望感にひたされてしまう。つまり、死への誘惑とためらい、信仰と不信仰、生への希望と絶望、これらの間を、Karin はたえまなく揺れ動き、往復しあるいは循環しながら、暗澹とした雰囲気の中かで最後の日々を送るのである。

しかしながら、このような内心の混沌にもかかわらず、きわめて特異なそして重

要な出来事が Karin の人生に起こっていることに注目しなければならない。そのひとつは Karin が見た「十字架」の夢である。この夢は Roger との交際が望めなくなってしまった夜に見られる。その夜、Roger はコペンハーゲンのまちを離れる決意を固めて、Karin に別れを言いにやってくる。そして二人のたましいの救いのためにひざまずき、無言の祈りをあげて部屋を出ていく。実際には、Roger は肉の衝動からもう一度だけでもどってくるのであるが、Roger から出発の決意を告げられた Karin は、Roger の不在によって生ずる孤独の苦しみを予感して、《Je me tuerais.》(p. 883) と口走っていた。まだ差し迫った欲求として死ぬつもりはなかったにせよ、「わたしは死を呼びもとめていた」(Ibid.) と認めているように、この時点から彼女のなかで死への願望が芽ばえたのである。Karin は傷心状態のなかで眠りにつく。そしてこのあと、Karin は不思議な夢を見るのである。

「わたしはあおむけになっていた。全く不動のそして受身の体勢にあった。わたしの上の方では黒いかたまりが宙吊りになっていた。そしてゆっくりと動くのだった。それが揺れ動きながら少しずつ下がり、わたしのほうに近づくにつれて、しだいにはっきりとした輪郭をとりつつあることをわたしが理解するのにいくらか時間がかかった。突然、それが十字架であること、わたしとちょうど同じ背丈の、非常に大きな十字架であることがわかった。それはわたしのからだから五センチのところとまり、わたしのからだの寸法を計っているように思われた。わたしは恐ろしさで叫び始めた。だが、わたしが叫び声と考えたものは、罠(piège)にかかった小さな動物の鳴き声のように弱々しいものにすぎなかった」(p. 884)。

この夢が意味するものは明きらかであろう。それは、Karin が神のめぐみを受けとったことを示しているのではないだろうか。夢のなかで Karin の眼の前に立ち現われた「十字架」とは、Karin が自殺にいざなわれるのを阻むために、Karin におとずれた神の愛の象徴的かつ具体的なしるしではないだろうか。このことは、Karin がその出現にたいして「罠にかかった」ような感覚をもつところからも明瞭であろう。この感覚はもちろん、理解しがたいものを前にした Karin の恐怖感から由来しているのであるが、しかしこうした Karin の反応は彼女固有の心理にそくしてよりも、もっと大きな枠組の中で把握されるべきである。すなわちグリーンにおいては、たとえば Pamphlet のなかの神の愛について言われたことば、「この恐ろしい愛は私たちにいかなる憩いも与えない。それは私たちを付け狙っているのだ」⁴⁶⁾ が示しているように、神の愛は本来、「付け狙う」もの、のがれたいものとも考えら

れており、それは当然「罠」としても知覚されるものとなる。1939年のカトリック教会への復帰をはさんでグリーンが書いた小説*Varouna*には、宗教への抑えがたい憧れ（つまり、神の愛の見えざるまねき）を語った、次のような一節が見出される。

「これは私に仕掛けられた罠 (piège) なのだ。(…) 私は自分のうちに宗教生活への誘引を認める。それにこの五年来、私は付け狙われていると感じるのだ」⁴⁷⁾ こうした文章と対比するとき、夢の中でのKarinの反応が神の愛のおとずれ、神のめぐみの介入にたいしてなされたものであることが疑いようのないかたちで諷解されるのである。

こののち、Karinは十字架の夢を見た際と同じように、自分に「罠」が張りめぐらされたような感覚をしばしばいただくことになる(p.910, 920, 925, 985, …)。そしてこの感覚とともに、彼女は宗教的なものの方へ不可避的にひきよせられていく。なかでも、KarinはRogerの出発後、次のような不思議な体験をするのであるが、その体験は彼女の人生の転換点に立つものとしてとくに注意を払う必要があるだろう。

ある晩、KarinはRogerなしに生きることの苦悩を痛切に知らされる。寂しさと悲しさに耐えられないKarinは、誰かがRogerのかわりに自分のそばにいてくれたらと願って、司祭に電話をかける。司祭はKarinに「Dites à Dieu que vous l'aimez.」(p.922)とすすめる。「Dites que vous l'aimez, Karin et vous l'aimerez.」(p.923)というのである。Karinはそのとき自分の上で「罠が閉じられた」(Ibid.)ように感じる。電話を切ったあと、Karinはほとんど衝動的に、以前Rogerが跪いたことのある場所へ行き、そこでRogerの仕草をまねる。そして司祭の勧めに従うのである。暗闇の部屋のなかで、Karinの口から「Je t'aime.」という言葉が洩れる。このことばは最初、「遙かなる存在」となったRogerに宛てて言われたのであるが、やがてKarinはRogerではなく、Rogerが祈っていた神のことを考えるようになる。Karinはもう一度、「Je t'aime.」とささやく。すると、突然「誰か」が暗闇の中に姿をあらわすのである。

「わたしは震え、押し黙ったままであった。ひとこと言葉も発することができなかった。でもわたしはこわくなかった。闇のなかの、わたしから三步離れたところに、誰かが立っていたのだ。わたしにはそのことがわかった。わたしが生存し、ひざまずき、よろこびにも言えなくなってしまったことをわたしがわかっていたのと同じように。」(p.923)。

この一節は1934年11月にグリーンじしんが体験した出来事に立脚して書かれている。その当時はグリーンがカトリック教会からもっとも遠く離れていた時代なのであるが、ある夕方、自室にいるとき、彼は「不意の、説明できない衝動」からひざまずく気になった。するとふしぎなことが起こった。家には彼ひとりしかいないはずなのに、たしかに「誰かが一分ほどのあいだ、自分の背後にいた」⁴⁸⁾のである。この神秘の出会いがなされた日を転機として、グリーン的人生は針路を変えることになった。彼は教会への漸進的な回帰の道をたどり、五年ののち決定的な信仰をとりもどすに至るのである。

*L'Autre*の一節がもつ、こうした自伝的な背景を考え合わせるとき、Karinが得た体験はきわめて貴重な、特権的なものといわなければならない。Karinが「誰か」を見た瞬間とは、しかるべき信仰へ導かれるために、彼女が神の国の啓示にあずかった一瞬であろう。そして「誰か」とはいうまでもなくイエス・キリストを指し示すであろう。Karinは自分に起こった出来事の正確な意味をわかっているとはいいたい。しかしそのときの印象を、「わたしを取り囲む世界は悪夢のように消え去り、わたしはただ愛だけが存在するもうひとつの世界の中で呼吸していた。そしてこの世界こそほんとうの世界なのだ」(p.923)と語っているように、Karinは少なくとも、日常的現実・目に見える世界(*le monde visible*)のほかに、もうひとつの現実・目に見えない世界(*le monde invisible*)が存在するという点は確信するのである。この神秘の出会いの記憶は、今後Karinのここに深い痕跡をとどめることになる。彼女は同じ体験、同じ感動が与えられることを望んで、しばしばひざまずくのである(p.949, 979)。

Karinに起こったこうした一連の出来事が端的に示しているように、Rogerとの別離のあとの彼女の人生は神の愛によって導かれている。Karinの内心の混迷にもかかわらず、神はその愛を彼女に投げかけているのだ。Karinは本人の自覚と意思を越えて、神の方へと向かうのである。*L'Autre*の第三部は、教会に入ったKarinが聖体顕示台を見て、聖体がおさめられたところに、主イエス・キリストが存在するのだということを信じるところで終わっている。決定的なものでないにせよ、生への積極的な意欲をもたらすものではないにせよ、Karinは迷妄の果てに自分なりの宗教を見いだすのだといってよい。結局、Karinの人生は地上的には悲惨への道でしかないとはいえ、摂理的には救済に至る過程を提示しているのである。

エピローグの第四部において、手記を完成したKarinは「Fini! Fini à jamais. Je m'en vais.」(p.987)と叫ぶ。この叫びはおそらく孤独な自分の生にたいす

る訣別の宣告でもあるだろう。Karin は家をとび出し、夢遊病者のように港におもむく。このとき、彼女は死のあらいがたい魅惑に身をゆだねているにちがいない。しかし Karin のこの世からの旅立ちが自らの選択の結果としてあるのではなく、二人のならず者たちの偶然の出現によってひき起こされるという点は重要だろう。つまり、Karin は死を待ち望んでいたが、Karin が死を選ぶのではなく、死が Karin を選ぶのである。この事実のなかに、先に触れた十字架の夢の場合と同様、神のめぐみの介入を読みとるべきではないだろうか。Jean Blot は二人のならず者たちを「死の使者」と見なしているが、⁴⁹⁾ 同時にこの二人は Karin の自殺をくいとめるために派遣された、神の使者だと解することもできよう。グリーンは日記のなかで、「己れの生命を自ら短縮するという重大な過失を犯さなかった」がゆえに、Karin は「救われる」のだと述べている。⁵⁰⁾ Karin の救済はこうしてその死によって達成され、最終的に証されるのである。

以上のように、私たちは 1949 年の Karin が Roger の出発ののち救いへの道をたどることを見てきたのであるが、ではこの Karin の救いあるいは宗教というものと、Karin のなかではぐくまれてきた Roger への愛とがどのようなかわり方をするのかを、つぎに確かめる必要があるだろう。1939 年、愛（人間への愛）は Karin にとって信仰（神への愛）と相容れないものであり、自己を破滅にいたらせるものであった。49 年の Roger にとっても、愛は同様にそうであるだろうか。否だ。重要なことに、Roger への愛は、死と遭遇する直前でさえ、Karin の内心で、神への愛とともに生きられており、しかも両者はいささかも矛盾・対立していない。それどころか、Karin の宗教への回帰は Roger との再会（愛）によってはじまっている。イエス・キリストとの出会いというまさに画期的な出来事も、Roger にたいする内心の愛が直接のきっかけとなって起こっている。先にも述べたように、Karin は孤独の苦しみと悲しさから《Je t'aime.》と不在の Roger に言い、次いで同じことばを、今度は Roger が祈る神のことを思いながら繰り返したとき、その神秘の出会いを体験するのである。この経緯が端的に示すように、Karin の救済は Roger を愛し、追いもとめる彼女の心によってひき出され、そしてこのころによって彼女の宗教は形成されるのだ。要するに、49 年においては、愛は十年前と正反対に、Karin の救いを誘導するものとしてはたらいっているのである。

こうしたことが成り立つのは、もちろん Roger の宗教的立場の変化にともなう影響が根底にあるからだろう。愛する相手が信仰を持つかたないかによって、宗教と

の関連で占める愛の位置が大きく左右されるのは当然のことだからである。あるいはまた、人間が「罫」をしかけられた動物のように神の愛からのがれられない存在なのだというグリーンのお考え方が背景にあることも看過してはならない。しかしこうした点をふまえつつも、やはり事柄は愛する主体である Karin の内面的問題としてとらえるべきであろう。つまり、グリーンが *L'Autre* において問いたいのは、人を愛することがどうしていけないのか、どうして信仰をもつことと両立してはいけないのか、どうして救いをなしとげることとつながってはいけないのか、という点ではないだろうか。たしかに人間的な愛は、それが切実であればあるだけ、肉体的欲求をともしない、罪を犯すことと容易に結びつく。そしてそれが信仰心を衰えさせ、救済を希求する姿勢を失わせてしまいかねないことはほんとうであろう。しかし孤独のなかで、肉欲にひたされながらも、苦しみ悶えつつ誰かをひたむきに愛し、追い求める人間のすがたは、自己の救いのたしかな証しを得るため、呻きもがきつつ神を呼びもとめる熱烈な信仰者の態度にどこかで通じるところがあるのではないだろうか。愛（人間への愛）と宗教（神への愛）とは結局、どちらも孤独の自覚に基づくという意味で、言い換えれば、この世に一人で、まるで見棄てられたように生きなければならぬという悲惨な現実からの解放をこいねがうところに立脚しているという点で、類似性をもつように思われるのである。「かつて一度も顔を見たことがなく、声も聞いたことがない誰かを死ぬほどまでに愛すること、これがキリスト教のすべてなのだ」⁵¹）とグリーンはいう。もしかして、信仰のなかには、恋愛的状況において見出されるような人間的な情熱によって支えられる部分があるのかもしれない。とすれば逆に、人間への愛が、宗教にむかわせてもよいような心情によってささえられることもあり得るのではないだろうか。実際、Karin において、Roger への愛をはぐくませているものは、肉体的要求だけではない。牢獄に等しい自分の家の部屋の窓から、医師 Maurecourt の住む白い館を眺めつつ夢想に耽る Adrienne Mesurat の愛と同じように、あるいはまた、Guéret によって顔面を鞭打たれ、見る影もなく傷つけられながらも、現実世界からの脱出を求めて Guéret の待つはずの場所へおもむく、*Léviathan* の Angèle の愛と同じように、Karin の Roger にたいする愛のなかには、この世にひとり生きることの苦しさや悲しさや空しさや不安からのがれたいという、たましいの飢えにも似た痛切な願いが、また、彼方に存在する幸福なるものへの、渴望に近いあこがれが入りまじっているにちがいないのである。そしてこの願い、このあこがれが Karin に信仰心を甦えらせ、彼女の宗教を形づくる基盤に転化するのではないだろうか。Karin は神の愛を希求

するにいたった発端を、Rogerへの愛を振り返りつつ書いている。

「おそらくわたしは Roger を愛していたのだろう。しかし同時にわたしは、ただ単に愛していたのだ。そこが肝心な点であった。わたしは愛したかった。(…)
幸福への郷愁がわたしを責め苛んでいたのだ」(p.911)。

あるいはまた、Rogerへの愛と神への愛とのかかわりについて、

「わたしは Roger と一緒になろうとつとめた。それが困難であることがわかって、次に Roger の神を求め、最後にただ神のみをもとめるようになった。そして神が Roger のかわりになった」(p.926)

と語っている。このように Karin の宗教は Roger への愛を支えていたのと同じ心情で形成されている。孤独であり、誰かの現存を必要としないではいられない Karin にとって、人間への愛も神への愛も、極限では<他者>への愛という点で重なるのであろう。だからこそ、彼女において愛から宗教への移行が、それも前者の否定・排除による移行ではなく、後者が前者を乗り越えるかたちでの移行が可能になったのだと思われるのである。

かくして、*L'Autre* の中の 49 年の Karin の在り方を通じて証されるのは、人間への愛が信仰をもたらし、救済の手段となる場合もまたありうるのだという点である。この証しのなかに、愛なるものと宗教的なものとを両立させたいという、グリーンひたすら願いと自己の全体的な救済への痛切な祈りがこめられていることを認めるべきではないだろうか。すでに私たちは、グリーンが同性愛の傾向とピュリタニズム的態度を有することで、終生孤独を運命づけられ、そしてその孤独の中で、肉体とたましい、欲望と信仰の葛藤に苦悶しつづけてきたことを述べた。さらに、この葛藤の過程で、肉なるものへの反撥から愛が悪であり、<他者>が悪の誘惑者であるという基本的な理解が彼の内心を支配することを指摘した。しかしながら、他者=愛へのこの敵視は、内心の葛藤を何ら解決しないばかりか、その苦悩を一層深刻にし、自己の矛盾を拡大することになるであろう。なぜならその敵視は、他者=愛なるものを希求する自己の一切を否定することにつながるからだ。ここからは自己の救済への信頼は出てこない。危機的な状況の中で、自己への絶望と神を失うことのおそれをいだって生きなければならないのである。人間が孤独な存在として地上に生きるかぎり、そしてそうであることを自覚するかぎり、自己の孤独さが癒やされることへの願いとして、他者=愛なるものへの憧れは抱き続けられるにちがいない。また、人間がたましいと同時に肉体を背負った存在としてこの世にあるかぎり、肉体的な欲望を消滅させることは不可能なのだ。とすれば、ひき裂かれ

た自己を否認・断罪することによってではなく、そのようなものとして受け入れ、あるがままの自己を神にゆだねることによってしか、自己の全体的な救済への道はない。さらには他者＝愛なるものを肯定し、これを希求する自己を認めつつ信仰に生きることこそ、信頼に通じるものであろう。それに、グリーンじしん、「愛は欲望に必ずしも拘束されない。それは絶えず欲望を乗り越えるのだ」⁵²⁾と言っているように、愛は肉の欲望をともしないつつも、それが真摯に生きられるとき、相手を快樂のための道具とするのではなく、欲望を昇華させ、たましいの次元での交わりを志向させるものであろう。たましいの愛は肉体的現実から霊的な現実への架け橋とはなり得ても、信仰と決して敵対するものではない。結局、グリーンは *L'Autre* において、愛のもつこうした positif な側面を確認することの中で、地上への愛着と天上への憧れとにひき裂かれた自己の二重性(dualité)を克服し、自己の統一 (unité) の達成をこころみているのだといえるのである。

したがって、*Moira* 以後、*L'Ennemi*, *Chaque homme dans sa nuit* を経て、*L'Autre* に至るまでの作品の流れは、<他者>の否定から肯定にいたる過程、愛のいわば復権過程としてとらえることができよう。これら四つの作品が<他者>との出会いという主題を宗教とのかかわりで扱い、内心の相剋のドラマを剔出しているという意味で類似性をもつことはすでに述べた通りであるが、私たちは信仰との関連で占める愛の位置がそれらの作品において徐々に変化し、上昇していることに気づくのである。

Moira において、fanatique な信仰を有し、肉との激烈なたたかひに生きる Joseph は *Moira* という混血の女との出会い以降、女への断ちがたい執着にさいなまれる。《Elle (=Moira) est entre Dieu et moi.》⁵³⁾と Joseph はいう。愛は Joseph において肉欲と同一視されるがゆえに、宗教の敵としかなり得ない。*Moira* を相手に罪におちいったあと、Joseph は絶望と混乱の中で女を絞殺してしまう。ここでは<他者>は徹頭徹尾、悪の誘惑者なのである。

Sud の中で《L'amour n'est pas un péché.》⁵⁴⁾という観念が表明されたのち、次の劇作 *L'Ennemi* において、はじめて愛が信仰をもたらす例が提示される。人里離れた城の中で主人公 Elisabeth が不具の夫と義理の弟の Jacques (彼は Elisabeth を愛している) とともに、空虚で退屈な日々を過ごしているとき、夫の異母兄弟の Pierre が突如出現する。Pierre は還俗し、修道院から逃げ去るようにしてやってきたのだ。Elisabeth は自分とは違った世界に住んでいたこの男に愛を覚える。だが同時に、この男(への愛)を通じて神を見いだすのである。《J'aime Pierre (...).

Et j'aime Dieu, (...) j'aime Dieu aussi.》⁵⁵⁾と彼女はいう。Elisabethの内心で二つの愛がせめぎ合う。Pierreを愛すれば愛するほど、＜敵＞である神が「欲望の成就」をはばむために立ちはだかるのだ。彼女はPierreへの愛を浄化することによって、信仰と両立させようとする。《Dieu ne nous a donné qu'un seul cœur pour l'aimer et aimer les hommes.》⁵⁶⁾という乳母のせりふにたいして、《Un seul cœur, pour aimer Dieu et les hommes, non pas un cœur partagé, mais un cœur assez grand pour que Dieu y vive avec Pierre.》⁵⁷⁾と言いつなぐように、Pierreへの愛を生きぬくことによって、こころの統一(unity)をはかろうとするのである。しかし統一は狂気の中でしか実現されない。Jacquesが嫉妬からPierreを殺させたとき、Elisabethは愛のはげしさゆえに発狂してしまうのである。

*Chaque homme dans sa nuit*のなかでもまた、愛は肯定的に描かれる。物語が始まったとき、主人公 Wilfred は世間から敬虔なカトリック信者と見なされながらも、実際は女たちと淫行を重ねるだけの惨めな人生を送っている。＜夜＞の中にいる Wilfred は、肉との争いに敗れた *Moira* の Joseph のその後のすがたを表現しているかもしれない。だが Wilfred は Phœbé という名の、清純で幼児***なごのような女性と知り合い、彼女へのたましいの愛に目覚めることによって、放蕩の生活から抜けでる。《Frère et sœur, Wilfred!》⁵⁸⁾といい、汚れない愛で自分を愛する Phœbé のやさしい心に触れることで、彼もまた自己の純粹さを希求し、同時に宗教へと回帰していく。たしかに二人は愛しあう過程で、官能の炎に身を焼かれる。しかし彼らは互いの信仰を傷つけることをおそれて、相手から離れたところで生きることを自分に強いるのだ。《Il faut laisser le corps tranquille.》⁵⁹⁾と Phœbé は手紙に書く。手紙を読んだ Wilfred は、《Laisser le corps tranquille ... C'était cela qu'il voulait, lui aussi, malgré tout.》⁶⁰⁾と考えるのである。この小説の表題は Victor Hugo の《Chaque homme dans sa nuit s'en va vers la lumière》という詩行から採られた。⁶¹⁾ Wilfred の救済は直接的には、半ば狂乱状態のうちに彼をピストルで撃った男 Max ⁶²⁾ を彼がゆるし、André Blanchet の指摘するように、「罪人への愛を抱」⁶³⁾ いて死ぬことからきているけれども、Phœbé との出会いが彼の上昇のきっかけとなったことは否定できない。とはいえ、Wilfred のこの突然の死は彼と Phœbé との愛の関係を中途半端のまま終わらせてしまう。まるでその死は、二人が直面するかもしれない危機を免れさせるために必要であるかのように。

そして *L'Autre* では、1939 年の Roger と Karin の愛（これは *Chaque homme dans sa nuit* のカップルの愛の進展したかたちとして受けとることができるかもしれない。Roger は Phœbé を知る以前の Wilfred といくらか類似している。Karin は Phœbé の進化した姿である）が宗教と敵対するものの、49 年には、愛はグリーン作品のなかでもっとも肯定的にとらえられる。それはより直接的・全面的な救済の手段となっている。再会後、二人は罪におちいる。だが、この罪を通じてさえも、Karin は宗教に回帰する。というより、この罪さえも、Karin が信仰を見いだすのに作用しているように思われるのだ。ここでは、〈他者〉との出会いはもうひとりの他者、絶対他者である神との出会いをひきおこす。たしかに *L'Ennemi* においてもそうだった。しかし、Karin の内心からは、Elisabeth を狂気にいたらせたような、情熱のはげしさは認められない。〈他者〉は文字通り福音を伝える人なのである。

V

以上のように、私たちは *L'Autre* における出会い（愛）の物語を、グリーンの同性愛の傾向、ついでピュリタニズム的態度とからませながら、あわせて、他の作品の物語と比較しつつ、分析してきた。ここで明らかなことは、愛が孤独と肉体の苦悩をひきおこすがゆえに、一方では悪であり、宗教から遠ざけるものであるとしても、他方では、49 年の Karin の例が示すように、信仰をもたらし、救済の手段となる場合もまたあるのだという点であり、さらにまた、〈他者〉が悪の誘惑者であり、わざわざをもたらす者であるとしても、福音を伝える人になることもありうるのだという点である。そして *L'Autre* が、グリーンの認識の基本をなす、他者＝愛への否定的な見方をうちにふくみつつも、他者＝愛のもつ肯定的な側面を確認したこと、つまり、わざわざをもたらす者が福音を伝える人にもなりうるのだということ、つまり、わざわざをもたらす者が福音を伝える人にもなりうるのだということ、その深い意義を有していることはもはや繰り返すまでもない。

L'Autre の証しは、言い換えれば、〈他者〉が悪魔の使者であるとしても、神の使者ともなりうるのだという点であろう。〈他者〉との出会いをとおして、悪魔と触れあうことになるとしても、悪魔の背後には神もまた存在するのだということであろう。この点、*L'Autre* は「この世の君との出会いは神との出会いでもありうるのだ」⁶⁴⁾ というグリーンの観念に裏打ちされているのであろう。もしかして神によ

る大いなる救いのわざは、悪魔の誘惑というきびしい試練を経る中でこそ成就するのかもしれない。L'Autreの第三部の末尾のところ、KarinはRogerと罪を犯すことによってさえ、神への信仰を見出すにいたったことに触れて、「たましいを救うために悪魔と勝負するとき、主はまやかしをすることがある」(p.986)と司祭に語っているが、この言い方のなかには、神と悪魔との争いのなかでは悪魔の勝利はありえないのだとするグリーンの見方とともに、個人の救済のためには、神は罪＝悪魔をも利用するのだという考え方がこめられているように思われる。

しかしながら、L'Autreの証しの一切をこうした見解と結びつけて考えるのは、重大な誤りであろう。なぜなら、<他者>が悪魔の使者になるか、神の使者になるかは、個人を越えたわざに依存すると同時に、個人の主体的な姿勢にあくまでもかかっているからである。すなわち、それは個人が<他者>にたいしていただく愛のあり方によって、つまり他者＝愛の中に肉体の現実を見るか、たましいの現実を見るかによって決定されるからである。さらには、他者＝愛を敵視する立場をとるか、それとも、それを受け入れ、肯定するか、によって大きく左右されるからである。そしてMoira, L'Ennemi, Chaque homme dans sa nuitにおいてと同様、グリーンがL'Autreで検証したことは、まさしくこの点にほかならないのである。

もともと、カトリシズムは霊肉分離的な発想をする思想ではない。肉体とたましいとは同一の次元において親和されるべきものとみなしている。⁶⁵⁾しかも、カトリシズムは神への愛とともに、あるいは、神への愛と一体をなすかたちで、<隣人>への愛を要求する教えであり、⁶⁶⁾同じことであるが、他者との連帯をまずもって希求する思想である。この点、肉との激烈なたたかいをまねくなかで、他者を悪の誘惑者と認識させ、MONDE(この世、世間、人々)をDEMON(悪魔)のアナグラムと見させかねないピューリタニズムの態度は、神への志向と強く結びついているとしても、カトリシズムの教えとは明きらかに抵触する。グリーンは日記のなかで、行き過ぎたピューリタニズムの態度への自戒の気持ちをこめて、

「もしみじめな人間の肉体に<悪>という呪詛のこぼれを浴びせるのではなく、愛(charité)の欠如に<悪>の名を与えるならば、偽りのキリスト教全体を互解させることができるだろうと私は思う」⁶⁷⁾

と書き、また霊肉分離の考え方を反省しつつ、

「まるで肉体が容器であり、たましいが中味であるかのように、まるで両者をことさらに切り離し、区別することができるかのように、肉体とたましいについて語られるのを聞く。しかし実際は、水と土が泥の中で溶けあうみたいに、それら

は混じりあっているのだ。(…)人は肉体によってたましいに達し、たましいによって肉体に達するのである」(強調グリーン)⁶⁸⁾

と述べている。*Moira* から *L'Autre* までの作品がグリーンにおけるピュリタニズム的態度を反映しつつも、こうした自戒と反省の上に成り立っていることはたしかであろう。したがって、〈他者〉否定から肯定への転換過程、愛の復権過程としての、*Moira* 以降の作品の流れは、グリーンの内心に横たわるピュリタニズムとカトリシズムとの統合のころみとも解することができます。そして彼が他者=愛のもつ肯定的な側面を確認することの中で、自己の二重性(dualité)から統一(unité)への道を模索するという事実は、カトリック的視点の導入によるピュリタニズムの止揚のころみとして受けとることができるのではないだろうか。*L'Autre* がこのころみにおける一種の帰着段階を示していることは言うまでもない。

とはいえ、統合あるいは止揚は放棄を意味するのではない点に注意を払っておかなければならない。*L'Autre* においてもまた、出会い(愛)の物語は破綻におわる。二人の愛は祝福されるにはいたらない。肉体のまじわりをとまなう愛はやはり滅びにいたらせるものと見なされているのだ。〈他者〉は「遙かなる存在」であることによってしか、福音を伝える人にはなり得ないのである。グリーンは「ベッドは愛の墓場である」(p. 834)⁶⁹⁾と *Karin* に語らせている。同性愛の傾向をもつ彼にとって、愛もしくは結婚による肉体とたましいの調和という発想は到底なしえないのであろう。愛と信仰との両立は、愛の浄化の方向にしかないのである。*L'Autre* の時点でも、ピュリタニズム的態度はグリーンのなかで確実に生きており、1946年の日記中の「重要なのはたたかうことなのだ。たとえそのたびごとに敗れるとしても。」⁷⁰⁾ ということばはなお有効なのである。他者=愛の問題に関する彼の苦悩は依然としてのこる。しかし *L'Autre* の証しはこの苦悩に積極的な意義を与えるものではないだろうか。孤独のなかでの欲望とのたたかいは神への愛と同時に他者への愛のためにささげられることになり、内心の矛盾・葛藤は結局、〈愛〉のなかで解決しうるのではないだろうか。さらにまた、その証しは彼の全体的な生にたいして光を投げかけるものではないだろうか。こうして、*L'Autre* は他者=愛の問題をめぐる、グリーンがくわだてた自己救済の過程でのひとつの到達点を提示しているといえるのである。

[註]

- 1) 事実、1916年のカトリックへの改宗ののち、グリーンはPère Créteの導きもあって、修道士生活への烈しい憧れを胸にいだいて生きた。19年の4月、修道院へ入る計画は放棄されるが、この放棄はのちに大いなる悔恨をのこすことになる。たとえば、「もし私が1919年、修道院へはいついたら、どうなっていたらどうか。私になりえたかもしれない別の者は今、何をしているだろうか」(*Derniers beaux jours, Journal II, 11 oct. 1942, IV, p. 688*)といった言い方は日記のいたるところに見いだされるし、また「この世を棄てることの誘惑」(*Le miroir intérieur, Journal VI, 2 juil. 1954, IV, p. 1342*)についても、しばしば語られている。この聖職へのあこがれは作品の人物を通してうかがうこともできる。*L'Autre*における49年のRogerはその一例である。
- 2) 60年代前半のグリーンの主な仕事は自伝の執筆であるが、この仕事と並行して、彼は*Chaque homme dans sa nuit*に後続すべき小説の制作をこころみていた。日記には、すでに62年10月に新作に着手したことが記録されている。同年11月の病いによってこの制作は断念されたのであるが、66年の8月の、自伝第四巻*Jeunesse*の中断・放棄ののち、再び模索が開始された。しかしながら68年2月まで決定的な構想は生まれなかった。2月18日、ドイツ軍占領下のコペンハーゲンでの振舞いにより、戦後人々から白眼視された女性をふと追憶することによって、ようやく*L'Autre*の着想が得られ、本格的な執筆の段階にはいったのである(cf. *Ce qui reste de jour, Journal IX, 18 fév. 1968, V, p. 461*)。
- 3) *Ce qui reste de jour, 6 avril 1968, p. 469*.
- 4) あるいは、自作*Léviathan*について言われたことは、「私は作中人物たちのすべてである」(強調グリーン。*Les Années faciles, Journal I, 5 oct. 1928, IV, p. 26*)を想起してもよい。このことばはグリーンの全作品にあてはまるだろう。
- 5) *Le Miroir intérieur, Journal VI, 6 juin 1951, IV, p. 1221*.
- 6) *Le Revenant, Journal V, 11 nov. 1949, IV, p. 1118*.
- 7) *Mille chemins ouverts, V, p. 931*.
- 8) この小論において、私はグリーン研究歴の浅さと語学力の未熟さをかえりみ

ず、会話文以外は原則として拙訳をこころみた（他の作品からの引用もこれに準ずる）。あわせて原文を載せるべきところであるが、事情により割愛せざるをえなかった。御叱正と御容赦をこいねがうしだいである。

- 9) 「私は直接の快樂だけが問題である男たちのひとりだった」(p.734)と Roger は書いている。
- 10) *L'Autre* の第二部は、Karin と会う約束をした Roger が、約束の時刻をすぎても彼女のすがたがあらわれないため、すっかり待ちくたびれてしまうところからはじまる：「私は随分前から待ち続けていたので、自分が夜の八時に、そこで、人気のない通りの片隅で何をしているのかもはやわからなくなりました」(p.715)。
- 11) 「私は Karin を哀れに思っていた。すべてはそこから始まったのだ」(p.761) と Roger は回想している。
- 12) あるいはまた、十年前をふりかえりつつ、Karin は「私は自由だった。今日のように、沈黙の厚い壁に取り囲まれてはいなかった」(p.829) と言っている。
- 13) *Christine*, I, p.6.
- 14) グリーン の作品のなかで、愛が告白され、一定程度の交流を見せるのは、*L'Ennemi* 以後のことにすぎない。これより前の作品においては、愛は不可能な・告白されないかたちをとる。たとえば私たちは孤独のなかで自らの愛の情熱を対象に打ち明けることなく生きる、おびたしい女性たちの存在に気づく。牧師 Sedgwick に惹かれる Emily (*Mont-Cinère*), 医師 Maurecourt に憧れる Adrienne (*Adrienne Mesurat*), 義理の兄あるいは弟に夢中になる Eliane (*Epaves*), Marguerite (*Varouna*), Elise (*Si j'étais vous ...*) など、枚挙にいとまがない。男性の側から女性への愛情にしても、Augèle に夢中になる Guéret (*Léviathan*), Marie-Thérèse に執着する Manuel (*Le Visionnaire*) の例が示すように、若干の接近がこころみられるものの、対象へのまともな告白はなされていない。さらにまた、グリーン の作品の中では、*Minuit* の M. Edme や *Varouna* の Bertrand Lambard をとおして、実の娘にたいする父親のよこしまな愛や、*L'Autre Sommeil* の Denis, *Le Malfaiteur* の Jean, *Moïra* の Simon, *Sud* の Ian などを通じて、男性間の同性愛が描かれているが、これらの愛も終始相手との交流をもつことなく生きられる。
- 15) グリーン の作品が他者との出会いを普遍的主題とする点は、Jacques Petit

もまた指摘するところである。彼はグリーンに関する第一論文 *Julien Green, «l'homme qui venait d'ailleurs»* (Desclée De Brouwer, 1969) の中で、次のように述べている：「よそからやってきた者、見知らぬ人が、突然、ただ出現するだけで、それまで静かだったひとつの宇宙をひっくり返し、眠っていた情熱（愛とか憎しみ）を目ざめさせ、ドラマへと導く。こうした構造タイプはジュリヤン・グリーの大部分の小説の中に見出される」（p. 35）。

- 16) *Terre lointaine* は1919年9月から22年7月までのヴァージニア大学留学時代を回想し、*Jeunesse* は帰仏当時から文学活動に入る24年11月の頃までの思い出を述べている。なお、*Partir avant le jour* は幼時から1919年の7月、志願兵として第一次大戦に従軍するところまでを、*Mille chemins ouverts* は従軍時代を経て、アメリカへ出発する頃までをあつかっている。
- 17) *Terre lointaine*, V, p. 1259.
- 18) *Jeunesse*, V, p. 1265.
- 19) *Vers l'invisible, Journal VIII*, 9 juin 1959, V, p. 190.
- 20) たとえば先に触れた Jacques Petit の論文 *Julien Green, «l'homme qui venait d'ailleurs»*（註(15)参照）は、グリーンの作品全体が Mark への愛の体験に還元されることを論証するために書かれている。すなわち、Petit は *Christine* から *Chaque homme dans sa nuit* までの作品が他者との出会いを出発点として形成されていることに着目する。彼によれば、他者は *Epaves* の Philippe にとっては溺れる女であり、*Si j'étais vous ...* の Fabien にとっては悪魔の化身である Brittomart といったふうに、必ずしも愛の対象としての存在に限定されるわけではないが、ともかくこの出会いによって物語が構成されているという事実をふまえて、彼はグリーンの作品のすべてを Mark との出会いという「同一の出来事のたえまない繰り返し」（p. 335）と見なすのである。また、Antonio Mor は、グリーンの作品における「不可能な愛」の主題が Mark への愛の体験に源を発することを指摘している (*Julien Green, témoin de l'invisible*, Trad. par Héléne Pasquier, Plon, 1973, p. 44)。さらには、Jean-Pierre J. Piriou は、Mark への愛の挫折の体験から作家グリーンが誕生したことを認めている (*Sexualité, religion et art chez Julien Green*, Nizet, 1976, p. 65)。
- 21) *Ce qui reste de jour*, 6 janvier 1970, p. 545.

- 22) グリーンにとっての制作がカタルシスの意味をもつことについては、Pierre Brodinも指摘している(*Julien Green*, Editions universitaires, 1957, p. 79). なお Nicholas Kostis は性と死の exorcisme という観点からグリーンの小説をとらえている(*The Exorcism of sex and death in Julien Green's novels*, Mouton, 1973).
- 23) のちに述べるように、グリーンは人生の中で幾多の宗教的危機に遭遇し、カトリック教会と絶縁した時期もある。しかし「神が存在しないかもしれないという考えは一度も私の心をかすめさえもしなかった」(*Derniers beaux jours*, 8 fév. 1939, p. 508) と述べているように、信仰が根本のところで失われたことは決してないのである。
- 24) *Le Revenant*, 26 fév. 1949, p. 1065. このことばは *Moïra*, III, p. 86. においても見いだされる。
- 25) *L'Œil de l'ouragan*, *Journal* IV, 2 mai 1943, IV, p. 721.
- 26) *Partir avant le jour*, V, p. 720.
- 27) 父親は長老派教会、母親は監督派教会の信者であった。ただし、父は1914年の母の死ののち、カトリックに改宗する。
- 28) 伊藤勝彦：『愛の思想史』（紀伊国屋新書、1965年）、「II. ギリシヤ的愛」p. 59を参照。
- 29) *Partir avant le jour*, p. 701.
- 30) *Ibid.*, p. 689.
- 31) もちろん逆に、グリーンにおける同性愛の原因を彼のピュリタニズム的態度にもとめることもできよう。
- 32) 私は男女間の愛が結婚によって祝福され、性の交わりも生殖という目的のために正当化されることをいいたいのである。
- 33) *Moïra*, p. 106.
- 34) Rogerは夜空を眺めながらしばしば生きることのよろこびにひたされる(p. 739, 792)。そしてそのたびに、視界に入った教会の尖塔の情景を描写している。グリーン自身にとって、星空の観照がつねに宗教的体験を意味することと考え合わせて、このことはRogerの見えないもの・絶対的なものへの憧れを表現したものとして受けとるべきであろう。また、Rogerは宗教を否認しつつ教会を訪れるという矛盾を犯す。そしてそこで偶然 Karinのすがたを見かけ、「幸福で光り輝く」(p. 803)彼女の顔を垣間みて、ほとんど羨望に近い感情

を覚えている。

- 35) 戦時中の行為をかえりみて、Karinは「からだを売るところか、わたしはからだを与えていたのだ」(p. 831)と書いている。
- 36) *Ce qui reste de jour*, 17 mars 1968, p. 467.
- 37) cf. *Jeunesse*, pp. 1348–51. なお、この習慣は1939年まで続いたという (cf. p. 1356)。
- 38) cf. *Ibid.*, pp. 1356–7.
- 39) たとえば「この国のカトリック教徒たちは、彼らの宗教がいったいほんものなのか、にせものなのか、自分たちがそれを信じているのか、いないのか、ということをもはや懸念しなくなるほどまでに、習慣のなかに随してしまった」(*Pamphlet*, I, p. 879)と彼は書き、また「ミサから帰ってきた人たちは語り、笑っている。(…)彼らはゴルゴタから帰ってきて、天候の話しをしているのだ」(*Ibid.*, p. 885)と痛烈な批判をこめて語っている。
- 40) 彼は「ほんとうの宣教とは狂気なのだ」(*Ibid.*, p. 889)と述べ、そして冷めてしまった習慣的な信仰よりも、情熱的に言われる、不信仰者の冒瀆のほうが好ましいのだと断言している(cf. *Ibid.*, p. 887)。
- 41) 「地獄の観念の方が天国の観念よりもたぶん酔わせるものがあるだろう」(*Ibid.*, p. 894)といい、また次のように書いている：«*Tout catholicisme est vrai s'il est dément, s'il crucifie la nature, s'il heurte l'homme dans ses affections, s'il est dur, s'il est véhément, s'il damne et s'il sauve dans la même minute.*» (*Ibid.*, p. 906).
- 42) cf. 1970年版 *Les Années faciles* (Plon) への序文。IV, p. 1488.
- 43) *Le Revenant*, 11 nov. 1949, p. 1118.
- 44) *Ibid.*, 9 jan. 1947, p. 957.
- 45) このことは端的には、司祭から手渡されたカテキスムの本をすぐさま公園の紙くずかごの中に捨ててしまうという行為によって明きらかである (p. 926)。
- 46) *Pamphlet*, p. 884.
- 47) *Varouna*, II, pp. 833–4. なお、「付け狙われている」という部分の強調グリーン。
- 48) *Les Années faciles*, 24 nov. 1934, p. 347.
- 49) Jean Blot: *Le Voyage romanesque de Julien Green* (N.R.F., avril 1971), p. 101.

- 50) *Ce qui reste de jour*, 17 sep. 1970, p. 574.
- 51) *Devant la porte sombre*, *Journal* III, 30 jan. 1941, IV, p. 556.
- 52) *Le Bel Aujourd'hui*, *Journal* VII, 3 mars 1955, IV, p. 1391.
- 53) *Moira*, p. 148.
- 54) *Sud*, III, p. 1071.
- 55) 56) 57) *L'Ennemi*, III, p. 1114.
- 58) *Chaque homme dans sa nuit*, III, p. 511.
- 59) 60) *Ibid.*, p. 673.
- 61) cf. Robert de Saint Jean: *Julien Green par lui-même* (Editions du Seuil, 1967), p. 127.
- 62) prostituéであり、Wilfredに執着するこの男は、自分の愛が受け入れられないことの怒りから撃ったのである。
- 63) André Blanchet: *La Littérature et le spirituel* II, ≪*La Nuit de feu*≫ (Aubier, 1960), p. 208.
- 64) *Préface aux Lettres de Surin* (1966), III, p. 1379.
- 65) 伊藤勝彦：前掲書，p. 59.
- 66) 坂本堯：『カトリックと日本人』（講談社現代新書，1973年），pp. 59－60。を、また、要理編纂専門委員会編『カトリック入門』（中央出版社，1971年），pp. 43－49。を参照。
- 67) *Le Revenant*, sans date avril 1950, p. 1149.
- 68) *Ibid.*, 22 juil. 1948, p. 1025.
- 69) 同じことばは *Vers L'invisible*, 5 avril 1964, p. 348. においても見出される。
- 70) *Le Revenant*, 24 jan. 1946, p. 898. また同じ考えとして：「それゆえ大事なことはおそらく勝つことではなくて、死ぬまでたたかうことなのだ」 (*Devant la porte sombre*, 24 juil. 1940, p. 520).

〔付 記〕

- (1) グリーンの作品からの引用はすべて、Julien Green, *Œuvres complètes*, textes établis, présentés et annotés par Jacques Petit, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, t. I, 1972; t. II, 1973; t. III, 1973; t. IV, 1975;

t. V, 1977. による。L'Autreは t. III, p. 709-991 に収録されている。L'Autreの引用文の頁数は本文に入れ、それ以外の作品からの引用文の出典は〔註〕において明示した。頁数の前のローマ数字は巻数をあらわす。日記からの引用は合わせて年代と日付をしめした。なお、上の全集版には1975年以後にグリーンが発表した作品、たとえば *La Bouteille à la mer (Journal X)*, Plon, 1976. や童話 *La Nuit des Fantômes*, Plon, 1976. や最近刊の小説 *Le mauvais lieu*, Plon, 1977. などは収められていない。今後、続巻が刊行されるものと思われる。

(2) この小論作成にあたり、本文または〔註〕で言及したもののほかに、下記の文献を参照した。(◎印は研究書、○印は小論文ないしはエッセー)

- ◎ Michel Gorkine: *Julien Green* (Nouvelles Editions Debresse, 1956).
 - ◎ Jean Sémolué: *Julien Green ou l'obsession du mal* (Editions du Centurion, 1964).
 - ◎ 佐分純一先生: 『ジュリヤン・グリーン』(慶応義塾大学法学研究叢書別冊, 1964)。
 - ◎ Oswald Muff: *La dialectique du néant et du désir dans l'œuvre de Julien Green* (Keller, Zurich, 1967).
 - ◎ Jacques Petit: *Julien Green* (第二論文, coll. «Les écrivains devant Dieu», Desclée De Brouwer, 1972).
 - 遠藤周作: 「情慾の深淵 —ジュリアン・グリーン『宿命』」(『宗教と文学』に収録, 南北社, 1963)。
 - 倉田清: 「誤った純粹主義 —ジュリアン・グリーン『宿命(モイラ)』」(『愛の悲劇と神秘』に収録, 南窓社, 1966)。
 - 原田武先生: 『ジュリヤン・グリーンのsensualitéについて』(大阪外国語大学フランス研究会発行 *études françaises* -8-, 1968).
 - Henri Clouard: «Julien Green, L'Autre» (*La Revue des Deux Mondes*, mars 1971).
 - 石塚守信: 『Julien Green, その «l'évasion» の意義について —作品L'Autreを中心に —』(日本フランス語フランス文学会発行「フランス語フランス文学研究」第21号, 1972)。
- (3) グリーンに関する研究書・論文はまだ数多くあるが、最後に小論作成に際して、Jacques Petitの二冊の研究書、上記の原田武先生の論文、および〔註〕

で触れた伊藤勝彦の『愛の思想史』の中の「II. ギリシャ的愛」（特殊なGide論である）から、とくに恩恵をこうむったことを明記しておきたい。

1978. 2.